［月刊］キリスト教書評誌

本のひろば

一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2015年9月1日発行（毎月一回発行）第692号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

聖書学との出会い　木原桂二

本・批評と紹介

山根道公 編・解題
井上洋治著作選集第5巻
遺稿集「南無アッバ」の祈り　伊藤幸史

ジョン・テイラー 著／土岐健治 訳
西洋古典文学と聖書　水落健治

ジーン・リトル 著／谷山幸子 訳
愛のみ旗のもとに　斎藤惇夫

ルーカス・フィッシャー 著／吉岡契典 訳
長老職　南 純

イヴリン・アンダーヒル 著／金子麻里 訳
実践する神秘主義　阿部仲麻呂

平山正実、斎藤友紀雄 監修
自死遺族支援と自殺予防　窪寺俊之

茂 牧人、西谷幸介 編
21世紀の信と知のために　西原廉太

上田光正 著
日本の伝道を考える1
日本人の宗教性とキリスト教　小島誠志

上田光正 著
日本の伝道を考える2
和解の福音　芳賀 力

ジョン・マッコーリー 著／河野隆一 訳
現代思想におけるイエス・キリスト
竹内一也

G.シュテンベルガー 著／A.ルスターホルツ、野口崇子 訳
ユダヤ教　内田 樹

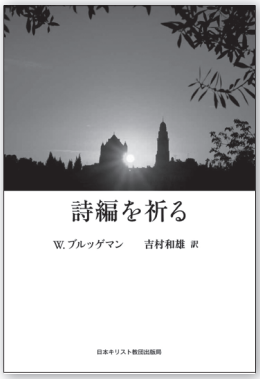
本屋さんが選んだお勧めの本

近刊情報

書店案内

9 SEPTEMBER 2015

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.jp ホームページ http://bp-uccj.jp《価格8%税込》



英語圏を代表する旧約学者が詩編の信仰の深みを伝える

詩編を祈る

W.ブルッゲマン　吉村和雄 訳

神との対話を求めて止まない、熱意と勇気が証しされている詩編。この詩編の信仰に学び、その叫びを自らの祈りとするための、懇切なてほどき。

◆四六判 並製・184頁・2,160円

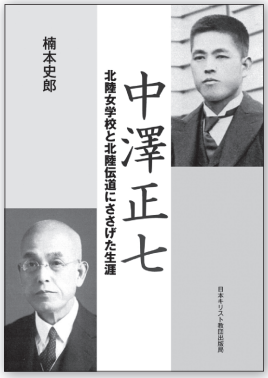
仏教が根強い北陸の地に生きたクリスチャン教育者

中澤正七 北陸女学校と北陸伝道にささげた生涯

楠本史郎

地方にあるキリスト教学校が、戦前・戦中をいかに歩んだか。国家とキリスト教の隘路をたどりつつ、その本質の堅持に努めた教育者の生涯を描く。

◆B6判 並製・152頁・1,296円



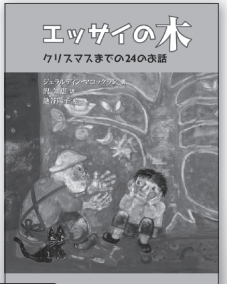
速報! キリスト教本屋大賞2015 大賞受賞!!

エッサイの木 クリスマスまでの24のお話

ジェラルディン・マコックラン 著
沢 知恵 訳　**池谷陽子** 絵

児童文学の名手が紡ぐ、「アダムとエバ」から「イエス」にいたる聖書のお話。

◆A5判 上製・158頁・1,944円 **2014年9月刊行**



キリスト教本屋大賞とは

全国のキリスト教書店員が、過去1年間に刊行されたキリスト教書からいちばん読んでほしい本を選ぶ賞。

★facebookで情報発信中
https://www.facebook.com/christianbookoftheyear

出会い・本・人

聖書学との出会い——木原桂二

高校卒業後、いわゆるバブルの絶頂期に証券会社に就職し、人生の方向性が定まったような気になった。しかし一方で、そういう気持ちを抱く自分自身への嫌悪感もあった。中学生の頃から読み始めた聖書の言葉が心に引っかかっていたからである（ルカ12・21）。二十歳の頃から教会に通うようになり、すぐにバプテスマを受けた。

キリスト教に出会った私は、間もなく牧師になることを決意し、そのための具体的な準備を始めた。神学校に入学するためには語学の習得が求められる。やがては神学書も読みこなさなければならない。そこで、まずは基本となる聖書の理解を深めたいとの考えから聖書学系の書物を読み漁った。荒井献著『問いかけるイエス』、田川建三著『イエスという男』を読んで衝撃を受けたのを皮切りに、関連書籍は漏らさず購入しようとした。ところが絶版本が非常に多く、インターネットの古書店も普及していなかったので、入手に大変な時間と労力とお金をかけたことを思い出す。

それはともかく「基本は聖書から」という思いで始めた聖書学系読書の日々を続けていくうちに、いつの間にか聖書学それ自体に引き込まれてしまった。青野太潮著『十字架の神学の成立』を読んだときは、教会のドグマと聖書の使信との間にある差異に気づかされ、まさに目から鱗であった。青野先生が教鞭をとっておられた西南学院大学神学部へと進んだのも、こうした出会いがあったからである。

神学部では青野教授のご指導の下、ルカ福音書の「不義な管理人の譬え話」で論文を書き上げ、無事卒業できた。このテーマを選んだのは、金銭欲からの解放という私の経験とルカの使信に共鳴するものがあったからである。

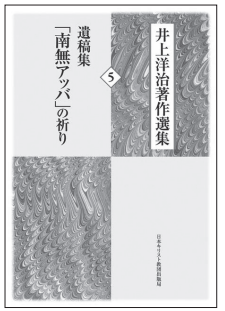
牧師として招聘された後も、牧会活動の傍らルカ神学探求への思いを抱き続けた。やがて関西学院大学大学院に入学し、D. Wider教授からご指導を頂いた。論文のテーマは、ルカに特徴的なmetanoiaを選んだ。metanoiaは一般的に道徳的な反省と宗教的な回心を表すものと解釈され、「悔い改め」と訳されることが多い。しかし「悔い改め」を求めることがルカの意図であったのか、疑問に感じていたからである。

ルカの物語を読むと、イエスに出会って新たな人生を歩み始めた人々の姿が見えてくる（ルカ19・1—10、24・25—31）。また、そこには出会いの喜びが満ちている。これと同じことが私の身に起きたのかもしれないと思うのは、おこがましいであろうか。

（きはら・けいじ＝日本バプテスト連盟北山バプテスト教会牧師、関西学院大学非常勤講師、神戸松蔭女子学院大学非常勤講師）

「日本キリスト教神学」の夜明け
山根道公編・解題著

井上洋治著作選集第5巻
遺稿集「南無アッバ」の祈り



伊藤幸史

時代に先んじた作品は、その時代の人々には受け入れられないことがある。そして時代の方がその作品に追いついた時に初めて、その価値が人々にも受け入れられる。

ところで、この『遺稿集「南無アッバ」の祈り』に示された〝井上神学〟は一つの作品といえる。平易な文章で綴られているが、そこには著者が心血を注いで生み出した思索の神髄が表現され、その誕生に至るまでの経緯も表されている。だがこの作品も時代に先んじ、その形があまりにも従来の「西洋キリスト教」と異なるため、今の時代には容易に受け入れられないかもしれない。キリスト教でありながら祈りに「南無」という言葉を用い、信徒ですらまだ聞き慣れない「アッバ」という神への呼びかけを用いる。この本のタイトルを見ただけで違和感を抱くという人もいるだろう。しかし、今ここで違和感を抱くからと言って、この作品の価値を安易に否定してはならない。安易で早急な判断はものごとの本質を見誤る。

「南無」とは、古来よく耳にする言葉だが、サンスクリット語の〝帰依・お委ねする〟という言葉に由来する。そして「アッバ」は、イエスが日常使っていたアラム語で、元来幼児が父親を呼ぶ言葉であり、また大人になっても親愛の情をもって父親を呼ぶ時に使う。つまり安心や信頼そして一体感の籠った呼びかけの言葉、それが「アッバ」である。

著者は語る。イエスの祈りは、いつもこの「アッバ」という呼びかけで始まっていた。この呼びかけにこそ、イエスが命懸けで示された〝悲愛と赦しに満ちた神の姿〟が示されており、この「アッバ」に幼子のような全幅の信頼を寄せて人生の道を歩む時、人は真の「安堵のやすらぎ」に到達できる。その歩みを支え、成り立たせるものが「南無アッバ」の祈りである、と。

この遺稿集で初めて〝井上神学〟と出会う読者は、まず巻末の著者の年譜に目を通すとよいだろう。そして「漂流――『南無アッバ』まで」を読んでみる。そこには著者が青年期以来、どれほど真剣に悩み祈りながら道を求めてきたか、また命を賭して学究に励みつつ〝日本文化の中に福音を開花させる〟ために、如何に必死な歩みを続けて来たかが示されている。「南無アッバ」という祈りは単なる思い付きで生まれて来たのではない。一人の稀代の宗教者が、長年にわたる祈りと思索の果てに、ようやくその人生の終盤においてたどりついた境地なのだ。

そしてこの遺稿を読み進めば、「南無アッバ」の祈りに基づく〝井上神学〟の特徴が概観できるだろう。それはまず、イエスの福音の根幹を〝父性原理の強い旧約の神ヤハウェ信仰の否定と超克、すなわち母性原理の強い赦しの神「アッバ」の開示〟と見る点にある。そしてさらに、東方正教におけるグレゴリオ・パラマスの神学をパウロの「キリストのからだ」と結び付け、キリスト教はすべての存在を神とみなす汎神論ではないが、すべての存在に神の本質と不可分の神のはたらきを認める「汎在神論」であると明示したのである。しかもそれが、日本の文化伝統の根底を流れる絶対無とそこから生まれ出ずる神聖な無の風（芭蕉の言う造化）の思想とつながり、さらにそれはイスラームの「存在一性論」といわれる神秘思想ともつながることを指摘した。こうした個と全体を関係の場においてとらえ不可分とする〝場の神学〟の開拓により、日本の風土に福音を開花させる可能性を開いたのみならず、今後の〝人間と自然との共生の神学〟あるいは〝諸宗教の平和と共存の神学〟の発展のための新たな道筋を示したのである。加えて読者は、この神学が現代社会で喘ぐ一般の人々に何とか寄り添いたいという、著者の切実な祈りのもとに生み出されていることに気づくだろう。「在世間キリスト者の求道性」や『南無アッバ』のお札くばり」という、一見奇異に見えるタイトルや行為も、遺稿に目を通して初めてその真意が理解されるのである。

冒頭にも書いたようにこの遺稿集は一つの作品である。ところで、著者の文中の言葉を借りれば私たちの人生は「アッバの作品」と言える。では同様に、一人の人物がその生涯を懸けて真摯な祈りの中に紡ぎ出した著作と思索もまた、人間の作品というより「アッバの作品」と言っては言い過ぎであろうか。この遺稿集を手に取る読者は文字の背後に「アッバ」の思いと語りかけを聞き、真のやすらぎへと導く「風」を感じることだろう。

（いとう・こうし＝カトリック東京教区司祭）

（A5判・二四八頁・定価二五〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

西洋古典への「読書の手引き」
ジョン・テイラー著
土岐健治訳

西洋古典文学と聖書
歓待と承認

水落健治

一九六七年、私が国際基督教大学の人文科学科に入学した直後に受講した授業に故・神田盾夫先生の「聖書と古典世界」という講義があった。ホメロスの『イリアス』を読み、『ヨブ記』の話がこれに続き、ソフォクレス『オイディプス王』の恐ろしい自己探求の物語が詳説され、『マルコ福音書』のキリストの不条理の死が語られたのち、レポートとして「義人の苦難について書け」という課題が出された。

私が研究職に就いた当初、この授業のことはそれ程意識の中にはなかったが、明治学院大学で授業を担当するようになって、この授業のことが頭から離れなくなった。『ヨブ記』も『オイディプス王』も人間のもつ知恵について何かとても大事なことを語っている。『ヨブ記』も『マルコ福音書』も世界の不条理について読者に考えさせている。そんなことを考えつつ私は、上記の著作に『創世記』冒頭の堕落物語やプラトン『ソクラテスの弁明』などをも加えて、「ギリシアとヘブライにおける知恵と知識」という授業を十五年近く続けた。

本書は、西欧の人々が「古典」と考えて来たギリシア・ラテン文学と聖書における「モチーフの並行性」を指摘した書物である。著者はオックスフォード大学で博士号を取得したのち、Leeds, Liverpool, Tonbridgeの中高一貫校で三〇年間古典ギリシア・ラテン文学を教え、その経験に基づいた恐るべき博識をもって本書を執筆している。

著者は言う。「古典とは何か」――（一）古典とは、我々がそれを初めて読む際にさえも、我々が（それ）を以前にすでに読んだ何物かを再読しているという感覚を与える、書物である。（二）古典とは、その予期されない様子と独創性が、我々が（それ）を噂で知っているという我々の感覚と正比例しているような、書物である。（三）古典とは、毎回毎回読み直すたびに……多くの発見の感覚を提供するような作品である（三一〇―三一一頁）。

西欧の人々は、古典のもつこのような「力」と「現代性」のゆえにそれらを繰り返して読み、そこに存するモチーフの並行性に思いを巡らし、そこから新たな思想を生み出して来た。『アエネイス』を執筆しようとしていたウェルギリウスにとってのホメロス、原始キリスト教団の人々にとっての「旧約聖書」、古代から近代に至る西欧人にとってのギリシア・ラテン文学と聖書はこのような古典の位置にある。

本書の第一章ではホメロスが、第二章ではギリシアの歴史書と悲劇、哲学書が、第三章ではウェルギリウスが、第四章では福音書と使徒行伝が、第五章ではギリシア・ラテン教父と近代のイギリスの著作家たちが論じられているが、その全貌を示すことは到底無理なのでひとつの実例のみを挙げることにしよう。

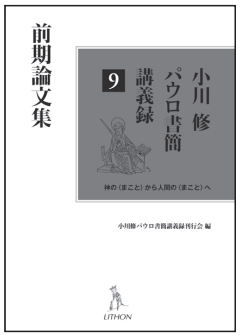
旧約聖書の歴史書には、エジプトを脱出したイスラエル民族がシナイ半島を放浪したのちペリシテ人などとの戦いを経て、父祖の故国である「乳と蜜の流れる地」に新たな国を建設する様が描かれているが、この物語はトロイ陥落後のオデュッセウスが様々な冒険・遍歴ののちに故郷イタケに戻る物語と並行している。紀元一世紀のウェルギリウスは『オデュッセイア』の物語を念頭に置きつつ、トロイ脱出後のアエネイスが地中海を遍歴した後、ラティウムの地に新たな故国ローマを建設する物語を残した。『アエネイス』を愛好したアウグスティヌスは、これを自らの魂の遍歴に当てはめて『告白』を書き、この観点を世界史に適用して『神の国』を執筆した。……

このような方法でギリシア・ローマの古典と聖書を読み直すことには多くの発見があるが、西洋の古典になじみのない日本人にとっては、それは極度に困難である。だが、本書に掲げられている膨大な書物をひとつひとつ読み解いて行くことによって、その道は少しずつ開けてくるのではなかろうか。その意味で本書は、西洋古典への「読書の手引き」とも言えよう。

（みずおち・けんじ＝明治学院大学名誉教授）

（A5判・三六六頁・本体五一〇〇円＋税・教文館）

新刊



前期論文集

小川修パウロ書簡講義録9
前期論文集
小川修パウロ書簡講義録刊行会 編
●A5判上製 三五〇頁 ●定価三二四〇円

本シリーズは、小川修先生が二〇〇七年四月から二〇一〇年一月に亘り、同志社大学神学部大学院で行った「パウロ書簡」の講義録である。本巻はその基となる著者の論攷（一九六八年から一九八八年までの二一年間）の一六編を「前期論文集」として収録した。

LITHON［リトン］
〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

描き出された懐かしい家族の物語
ジーン・リトル著
谷山幸子訳

愛のみ旗のもとに
ある宣教師一家の物語

斎藤惇夫

一九三二年生まれで、カナダを代表する作家ジーン・リトルの、自らの母親についての物語『愛のみ旗のもとに』が、三十年ほど前に彼女の作品に出会い、心ひかれ、後年カナダを訪れ彼女と親交を結ぶまでにいたった訳者の手によって翻訳出版された。カバーに、母親とその姉の写真を飾り、バラを添えた、地味だが内容とよく調和した美しい本である。

リトルの作品は、すでに我が国でも『ミンのあたらしい名前』、『これ、あたしの犬』（共に講談社）、『パパのさいごの贈りもの』（偕成社）など、数冊翻訳出版されていて、いずれも、傷ついた魂が、自らの戦いと家族や動物によって支えられ癒されていく、信仰に根ざした甦りの物語であり、子どもたちにも支持されてきた。またリトルが作家になったいきさつは、『天国のパパへのおくりもの』（女子パウロ会）で語られており、そこでは目に重度の障がいを持つリトルが、偏見や差別と戦いながら、物語を書くに至るプロセスが語られる。

さて、一九九五年に刊行されたこの『愛のみ旗のもとに』（ソロモンの雅歌二章四節）は、リトルの母親（一九〇二～九二）の物語であると同時に、母親を描くことによって浮き彫りにされていく、カナダと台湾に親子が別れ別れになって住むことの多かった、特殊な、しかし揺るぎない信仰・信頼で結ばれた宣教師一家の物語である。

リトルの母、愛称ゴリーは、台湾で宣教に携わる父親と母親とともに幼児期を台湾で過ごしていたが、教育の問題もあり、母親に連れられてカナダに戻り、先に戻っていた兄たちと親戚の家に住む。そして母親が台湾の夫の元に戻ったあと、十六歳で大学に入り医学を志し、やがて愛する人と出会い、二人で、台湾で医師を務め――そこで作者のリトルが生まれるのだが――第二次世界大戦の直前にカナダに戻り、亡くなるまでを故郷で過ごす。リトルは、その母親の生涯を、強度の眼疾患を持つが故に「印刷物を読むことができないので」、「多くの人の助け」――聞き続けることによって、幼時から青春時代までを軸に語る。母親が亡くなってから四年後にこの本が刊行されていることを思うと、いかに必死の取材を重ねたかが想像できるし、母親に対する感謝と尽きせぬ愛情をどうしても書かずにおられなかった作者の心中が痛いほどに心に響く。いかに、世間や親戚が、そして家族全員が、宣教師の仕事を認めているとしても、幼いゴリーは、両親と別れ別れに住まなくてはならないのである。物語は、その環境をゴリーが受け入れ、揺れ動きながらも成長していく姿が、さまざまなエピソードを交えて語られる。第一次大戦では兄の死も経験しなくてはならないし、まだ大学で医学を学ぶ女性などほとんどいなかった時代に、好奇の目にさらされながら、男子学生の中で敢然と学びつづけなくてはならなかっただろう。リトルにとって母親を描くことは、障がいを持つ娘に、「あなたは自分の人生を自分で生きなくてはならない」と言いながら、彼女を支えてくれた「生き方」を言葉で確認するための作業であったように思える。

ゴリーの兄弟は六人で彼らが本名や愛称で呼ばれたり、彼らを受け入れる親戚一同が入れ替わり立ち替わり登場したりして、最初は少々物語に入りづらいが、それを救ってくれるのが、随所に記されている、ゴリーが夢中になって読んだ物語である。幼児期に姉から読んでもらった『黒馬物語』をはじめとして、フェアリー・テール（おそらくジェイコブズの『イギリスの昔話』）、そして、『小公子』『小公女』『赤毛のアン』『秘密の花園』……、とくれば、誰しもゴリーの心の中を安心して覗くことができ、特殊ではあるが、決して特殊ではない、信仰と愛によって結ばれた一つの家族の生き方を、心に刻むことができる。それは、この物語が、懐かしい家庭の物語の伝統に沿って書かれているからでもある。

（リトルはこの作品で“Inperial Order of Daughter of the Empire”を受章している）。

（さいとう・あつお＝児童文学作家・編集者）

（A5判・二七〇頁・本体二〇〇〇円＋税・聖公会出版）

聖公会出版
――新刊案内――

宗教を開く 宗教多元主義を越えて
著●中村 博武／古荘 匡義／本多 真／岡崎 秀麿
（四六判・上製 本体価格2500円）
キリスト教と仏教の信仰の在り方、宗教の現代的意義などをテーマに双方の研究者が論述。仏教、キリスト教という教義に基づく宗教概念をいったん解体するとどうなるかという議論から興味深い論考を展開する。

心を神に 礼拝への思索と実践
著●加藤 博道
（四六判 本体価格2500円）
「具体的な礼拝の経験が、信仰と教会を形成する」。そのような視点から著者は教会の礼拝の持つ歴史的な背景、豊かさを示すとともに、それらが今を生きる教会の中で、どのように生き生きとダイナミックな姿を表すことができるかを叙述し、未来への希望を語る。研修会等に最適な本。

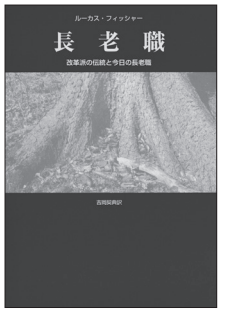
宇宙論と進化論とキリスト教 科学と聖書が協奏する新たな啓示
著●ジョン・ホート 訳●田中 公一
（A5判・上製 本体価格3800円）

お役所仕事に万歳四唱 プレベンの青春
著●フィン・セーボー 訳●野沢 みどり
（四六判 本体価格1800円）

〒170 - 6045
東京都豊島区東池袋3 - 1 - 1
サンシャイン60 45階
☎03(5979)2252 FAX 03(5979)2253

長老職の学びと再検討のための好著

ルーカス・フィッシャー著
吉岡契典訳
長老職
改革派の伝統と今日の長老職



南　純

訳者は「あとがき」で、本書が「教会について考え、また改革派教会の要諦ともいうべき長老職について改めて学ぼうとされる読者の一助になることを祈っている」と記しているが、評者としてもまさに同感である。これまで類書がほとんどなかったからである。読者は、先に出版され姉妹編ともうたわれる『執事職』と合わせ読むことによって、改革派教会の伝統と共に今日的課題にも啓発されるに違いない。

さて、著者フィッシャーは世界教会協議会（WCC）の信仰職制委員会や世界改革派教会連盟（WARC）の神学部門でも指導的な役割を果たしたスイス改革派教会の神学者であるが、すでに邦訳されている『神の霊 キリストの霊――「フィリオクェ」論争についてのエキュメニカルな省察』（一麦出版社刊）の編集に見られるように、キリスト教全体の視点から長老職を歴史的・神学的・実践的に考察している。

本書は、一九九〇年にジュネーブで開催されたスイス・プロテスタント教会連盟による「改革派教会の伝統における長老職の重要性」に関する協議会に提出された二つの論稿からなっている。それらはいずれも「歴史的考察を土台としつつ、幅広くかつ現実的な視点から長老職を論じた」（訳者あとがき）ものである。

第一の論稿は「改革派教会における今日の長老職」と題され、長老職の聖書的根拠などにも簡単にふれているが、主に「今日」の問題として、「長老の選出、任職、養成、つとめと権威」、さらに「地域、国家、地球的レベルの教会生活における長老の役割」や「エキュメニカルな対話における長老職」にまで説き及んでいる。そして、「重要なことは、歴史的形態の多様性の中から、永続的で規範的な示唆を引き出すこと」と「聖書証言の新しい研究」にあるとまとめている。

第二の論稿「改革派の伝統における長老職」は、三〇頁ほどの第一論稿に対して、二倍以上の約八〇頁からなっている。こちらは「世界改革派教会連盟の主題」「改革派の伝統における長老職」「新約聖書の基礎」「今日の長老職」という四つに分けられるが、その中心は二番目の宗教改革前のモラヴィア兄弟団から現代に及ぶ歴史的考察の部分にあり、会衆派教会やディサイプルズ教会、合同教会における長老職にまで説き及んでいる。これらの考察の結果、「長老職は、今日の多様な改革派諸教会の中に、実に多様な形をとって存在している」とした上で、「もし今日の改革派諸教会における長老職のあるべき姿を見出したいと望むなら、私たちはまず、長老職を取り巻く状況が、十六世紀以来、根本的に変化してしまったということを認める必要がある」と言う。その変化は、「教会と国家の関係」「教会全体の役割」「訓練の執行」「伝道のはたらき」「教派的な立場の変遷」などに見られると指摘し、「改革派教会は他の諸教派との一致と共通の証しを実現するような方向へと自らをオープンにすべきである」と説き勧めている。

最後に、「世界教会協議会の『洗礼・聖餐・職務』についての批判的検討」が補遺として加えられているが、これはフィッシャーの二つの論稿がこうした世界教会協議会での協議との対話の上に起草されていることを改めて示す役割を果たしている。

ところで、本書は専門的な研究書と見るならばものたりないかもしれない。しかし、本書はむしろ長老職ないし長老制が今日の世界で直面している実践的課題を示すところにあろう。こうした問題提起を受けて、わが国の改革派ないし長老派の諸教会には残念ながらこれに対応できる協議の場がない。したがって、とりあえずは教会員や牧師、長老がこれを読んで啓発されるように、各個教会内で学び始めることから出発しなければなるまい。そうしたテキストとして用いるならば、本書編纂の意図も生きてくるに違いない。一麦出版社が今や入手し難い論稿を集め、敢えて「日本語オリジナル版」の出版に踏み切ったのもそうした用い方を予期してのことであろう。

翻訳も全体的によくこなれていて読みやすい。なお、六五頁以下に出てくる一五三八年のブツァーによる『魂の配慮について』と『牧会論』とは同一書であるが、「この著作は、ストラスブールでの彼の仕事の最後の年に纏められたものである」は明らかに間違い。また、一二六頁の「七世紀」は「十七世紀」のミスプリ（これらは原著のミスプリであろうが修正すべきであろう）。「バッキャン」は「ブカーン」の方が一般的。いずれにせよ、本書の翻訳のご労苦には改めて感謝したい。

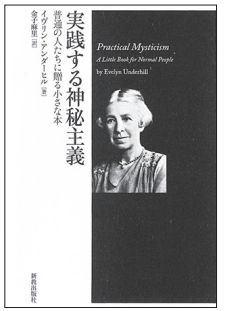
（みなみ・じゅん＝日本キリスト教会無任所教師）

（A5判・一四〇頁・本体二〇〇〇円＋税・一麦出版社）

静かに瞑想する人ほど勇猛果敢にふるまう
イヴリン・アンダーヒル著
金子麻里訳

実践する神秘主義

普通の人たちに贈る小さな本



阿部仲麻呂

物静かな人が、ここぞと言うときに相手をかばって大胆にふるまう、という事態が、しばしば生ずる。つまり、心のまったき静けさのなかで深く沈潜した「観想的な生」によって支えられている人ほど周囲の相手を徹底的に守り抜くという「実践的な行動」を勇猛果敢に果たす場合がある。たとえば、ジャンヌ・ダルクやナイチンゲールなど、歴史上において仲間たちの解放に大きな役割を担った人々の生き方を見れば一目瞭然である。そして市井の母たちも同様だ。

本書は、心を落ち着かせて自分の根源に立ち返ることで、あらゆる相手を熱烈なまでに大切にする圧倒的な愛情のエネルギーを的確に方向づける技法を示す。ちょうど百年前に、第一次世界大戦という未曽有の戦争の足音が激しくなる時代のまったなかで、イヴリンは独りで冷徹なまでに現実を直視していた。人類の行く末を案じる、その飽くなき愛情こそが本書を完成させたのである。

彼女の文体には気品があり、常に落ち着きと賢明さが芳香を放つ。つまり、おだやかで、あたたかい。彼女の文章のはしばしからは藝術的な創造性が力強く伝わってくる。それゆえに、本書を読む者も物静かなひとときを味わい尽くす道行きに、おのずと招き入れられてゆくことになる。戦争の喧騒のまったただなかで、無益な酩酊に決して同調することなく、むしろ目の前の相手をいのちがけで愛おしむ決然たる心の闘いの火ぶたが切って落とされる。イヴリンは、まるで愛情深い母親のごとく読者を受け留め、同行二人、徐々に変容させゆく。

本書全体の構成は、日常生活を洗練させる自然体の生き方を実感させるように巧みに仕組まれている。しかし、決して意図的な策を弄しているわけではない。むしろ、清らかで単純明快な意欲に満ちた毎日の沈思黙考の成果がほとばしり出るかたちで、おのずと結晶化した結果として透明感あふれる見事な構造が顕現する。第一章から第三章までは、神秘に触れるための前提を懇切丁寧に確認している（神秘主義とは何か／《実在》の世界／神秘家の準備）。第四章から第六章までは、祈りの深め方の技法を人間の心の動きとも照応させつつ教えてくれる（「黙想」と「潜心」／自己適応について／愛と意志について）。その際、思考が黙想へと深まり、さらに観想へと至るのだが、その洗練のプロセスそのものが潜心であり、「注意力を鍛えて単純化すること」（六二頁）を意味する。第七章から第九章までは、黙想や潜心をさらに深めるための「観想」の三段階を順を追って追体験させてくれる（観想の第一段階、第二段階／第三段階）。最後に第十章では「神秘的な生」そのものの意味を提示する。

総じて、「一致」の重要性が強調されている。自分の生存基盤と適合して生きてゆくことに尊さを感じることから始めて、次第に高次の状態へと段階的に飛翔してゆくことが人間のまっとうな旅の方途として重視されている。この視座は、本書の内容を敷衍させて評者なりに言えば、まさにトマス・アクイナスによるConnaturalitas（親和性、共本性）の認識と実践とも重なる。つまり人間は愛する相手に対して親しみを感じて調和しつつ共同生活を営むことで、同じ志をいだいて一致してゆくのであり、その積極的な近接の方向性こそが三位一体の神の交わりに倣うキリスト者の道行きを自覚させ、回心の歩みとなる。

国際法の現実的な学びを出発点としてキリスト教霊性の奥深い洞察の深みをも究めようと志す研究者でもある翻訳者の金子麻里氏は相手の心の奥にしまわれているあらゆる感情の根源にまっすぐに向き合う誠実さを、ゆっくりと洗練させてゆく。静かに、静かに。深い想いが丁寧に清められてゆく。その繊細で愛情深い性質が金子氏の物腰の柔らかさや外貌の美しさを一層引き立たせているばかりか、イヴリンの物言いと確かに呼応する。だからこそ本書の刊行は特に女性たちの心の美しさを洗練させる良質な手引書となるだろうし、せちがらい世の中で気品を保つ際の拠りどころとしても意義深く、時宜に適っている。イヴリンのメッセージは、金子氏のまごころこもった渾身の翻訳と詳細な註釈によって、まるで水を得た魚のように活き活きと世に泳ぎ出たのである。

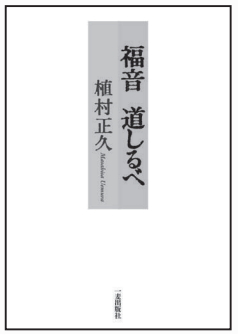
（あべ・なかまろ＝日本カトリック神学会理事、日本宣教学会常任理事）

（四六判・二三〇頁・本体二一〇〇円＋税・新教出版社）

福音 道しるべ

植村正久
Masahisa Uemura

大森教会「福音道志流部」現代語訳委員会［訳］



君に届け！

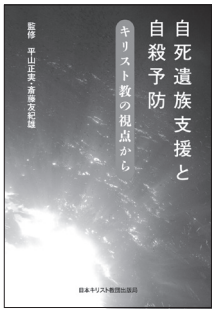
27歳，青年植村，
現代の言葉で
福音を語る．

四六判
定価［本体850＋税］円
ISBN978-4-86325-079-6

株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

大反響「シリーズ 自死を考える」書籍化
平山正実・斎藤友紀雄監修
『信徒の友』編集部編

自死遺族支援と自殺予防
キリスト教の視点から



窪寺俊之

毎年3万人の人が尊い生命を自分から断っている事実は、私達の心を痛めます。まして、ご遺族はそのことで生涯自分を責め、悩み続けられることを思うと心が痛みます。何としても防止したいと願います。

雑誌『信徒の友』で多くの人の関心を集めた連載が『自死遺族支援と自殺予防』（監修　平山正実・斎藤友紀雄）として出版されました。第1章「自死遺族を支える」、第2章「自殺予防の取り組み」、第3章「死にたい人と自死遺族と自死者のために」という3部構成です。遺族支援や自殺予防に長い経験をもつ専門家、愛する家族を失ったご遺族、自殺未遂者、更に『信徒の友』連載時の読者など、幅広い執筆者層です。どの章も自殺予防といのちの大切さを強く訴えていて、私は圧倒されながら読みました。

自殺は個人の精神病理も深く関わっています。自殺統計によれば「自殺の背因としては八割以上がうつ病などの精神疾患」（五七頁）をもっているといいます。うつ病の苦しみから逃れるための自死だとしたら医療的対策が急務です。一方で、自死には現代社会の根源的問題が関わっています。真の人間の価値の自覚、社会や家族の構造の問題、個人の生き方や宗教の問題などです。自死者の生活は社会の中で営まれており、その社会を作っているのは私たち一人一人です。この本のある著者は「私たちこの現代社会に生きている者には自死者に対する負い目があるのではないでしょうか」（五二頁）と語っていますが、この言葉が私の胸を刺しました。この言葉は自死者を弱い者と見てしまう私たち自身に深い反省を促し、責任があることを気付かせてくれます。更に、「自死者は、繊細、純粋、心やさしい人たちで、死ぬまで精一杯努力し、まじめに生きた」（二二四頁）人たちですという言葉も自死者への認識を変える言葉ですし、自死者への著者の深い愛を感じさせてくれました。

自殺予防には何が必要なのでしょう。「死にたくなる心の叫びを誰かに無条件・無批判で受け止めてもらえたなら、自殺はしたくなくなるのです」（二〇三頁）とあります。また、「自殺予防に必要なことは、根源的な絶望が露呈した」人に、「超越者という基盤、すなわち神の御手の上の平安（中略）を伝えることと」（一六一頁）という言葉はキリスト者であるからこそできる私達の務めです。神様でありながら人間の姿をとって人間と共に住み、人から罵られ、嫌われ、空腹になり寝る場所さえない生活をされたイエス様を想起したいものです。人を信じられなくなり、自分にも愛想がつき、未来が真っ暗になったとき、私たちの脇にそっと寄り添って来てくださる主イエス様に目を開きたいものです。孤独と虚無の虜になっている私をじっと見ていてくださり、私たちが弱いときにこそ、最も近くに近寄ってきてくださるイエス様に気付きます。

最近、希死念慮で苦しむ妹をもつ人から相談を受けました。妹が中学3年生で家に引きこもっていて、手首を切り自虐行為もあり「死にたい、人を殺したい」と叫びます。両親は驚き、うろたえ、専門家に相談したそうです。相談に来たその女性に私は尋ねました。「あなたはどんな気持でしたか」「私も同じような経験があるので、妹の気持ちが分かり、唯、話しを聞いてやりました。誰かに気持ちを分かってほしいんです」。経験者だから分かる妹への優しさと落ち着いた対応に驚きました。

この書物には自死に関する多くの情報も提供されています。各国における自殺率（二四頁）、原因・動機別の自殺者数の推移（三二頁）、「自殺したい」と打ち明けられたときの対応の仕方（二〇四頁）、自死遺族支援や自殺予防に取り組んでいる団体の連絡先など実際に役立つ情報が多く載っています（二三一～二三六頁）。また、重いテーマであるにもかかわらず、具体的に大変読みやすく書かれています。自死遺族支援と自殺予防とを考える最適な書物です。是非、教会の読書会や勉強会でも用いられるよう、お薦めしたい本です。

（くぼてら・としゆき＝聖学院大学大学院教授）

（四六判・二四〇頁・本体一八〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

井上洋治著作選集1《全5巻》
日本とイエスの顔
山根道公 編・解題
山本芳久 解説
第3回配本
日本人の心情で福音を捉えるべく苦闘してきた著者の、思索の礎石にして記念すべき第一作。著作選集版では新たに解題と解説を加え、遠藤周作らのエッセイを収録。
A5判 上製・248頁・2700円

シリーズ案内 各巻2,700円
2 余白の旅―思索のあと《2015年9月刊行》
3 キリストを運んだ男―パウロの生涯《2015年11月刊行》
4 わが師イエスの生涯《好評発売中》
5 遺稿集「南無アッバ」の祈り《好評発売中》

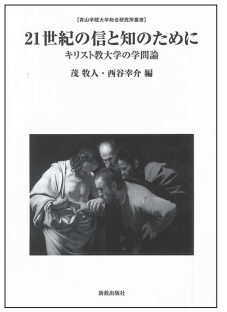
祈り こころを高くあげよう
渡辺正男
これから祈り始める方への贈り物として
『信徒の友』巻頭の「祈り」を単行本化。著者ならではのやさしい言葉づかいで捧げられる祈り40編。
四六判 並製・112頁・1,188円

CD版 讃美歌21による礼拝用オルガン曲集
第6巻 キリスト者の生活
飯 靖子／志村拓生 演奏
使用ストップと演奏のポイントが分かる音楽CDシリーズ。奏楽の参考にはもちろん、個人の鑑賞用にもおすすめ。 39曲収録・1,944円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格8%税込》
http://bp-uccj.jp

21世紀の信と知のために
キリスト教大学の学問論

今こそ必要な学問論構築のために
茂　牧人・西谷幸介編



西原廉太

去る六月八日、文部科学省は全八六の国立大学へ通知を出し、文学部など人文社会科学系の学部・大学院の廃止や見直しに取り組むよう指示した。文部官僚や政治家が、いかに「学問とは何か」「大学とは何か」に無知蒙昧であるかを露呈する天下の愚策と言えるが、そもそもそうした背後にまともな「学問論」が不在であることが決定的な問題なのであろう。このような事態の中で、本書は、キリスト教大学関係諸氏のみならず、他私学、ひいては国公立大学の教員たちも熟読すべき数多くの重要な論点を提示している。

本書は、青山学院大学総合研究所プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」の、二〇一〇年度から四年にわたる研究成果であり、研究プロジェクトメンバー九名の気鋭の学者による書下ろし論文集である。特筆すべきは、この研究プロジェクトによる本書以外の果実として、三冊の重要な「大学学問論」が本邦初訳として出版されたことである。それらは、パウル・ティリッヒ『諸学の体系――学問復興論のために』（法政大学出版局、二〇一一年）、ヴォルフハート・パネンベルク『学問と神学』（教文館、二〇一四年）、スタンリー・ハワーワス『大学のあり方――諸学の知と神の知』（ヨベル、二〇一四年）である。ティリッヒ、パネンベルク、ハワーワスという三大神学者の学問論が訳出されたことに敬意を表すると共に、こうした基礎的作業が、今後の日本におけるキリスト教大学をはじめとするすべての大学将来構想に大きく寄与するものと確信する。

さて、紙幅の制限もあり、九名の執筆者による一二本の論考すべてを紹介することは不可能であるので、本書全体の五分の一の分量を占める基調的論考である、西谷幸介の論文、「学問論の文脈における青山学院大学教育方針の意義」を中心に、その論点の一つを整理しておきたい。

「建学の精神」をいかに理解、表明し、またそれを堅持するかは、キリスト教大学の教育・運営に責任をもって携わる者にとっては、誰しもが苦悩する問題である。各大学の「建学の精神」は、まずもって当該大学の寄付行為に表示されているはずであるが、学校法人青山学院の寄付行為第4条1項には、「青山学院の教育は、永久にキリスト教の信仰に基づいて、行われなければならない」と記されていることを知り、評者は非常に驚いた。また青山学院大学学則第3条には、「本学の学生は、キリスト教に関する所定の科目を履修するほか、本学が行う宗教行事に出席するものとする」とあるという。西谷も強調するように、これは青山学院が、「わが国のみならず恐らく世界的に見ても稀有な、従ってまた貴重な、こうした明確なキリスト教大学としての建学の精神を」掲げ続けているという証左である。しかし、西谷が論じる中心点は、この事実を「学問論」として掘り下げる時に、それが青山学院の「学問全体」にとっての「統合原理」となっている、というところに他ならない。

西谷は、ティリッヒの「すべての学問は唯一の真理に奉仕するものであって、全体との関連を失えば死滅してしまう」という言辞を引用しつつ、また、シェリングやブルーム、ハワーワスの議論を縦横無尽に編み込みながら、彼らの学問体系論の中に、「既に職業への意識をもった学生を大学の学問体系即ち統合的カリキュラムのうちに――とくに一般教養教育の観点から――いかに導入していくか」という問題意識が共有され、さらには、まさしくそこにおいて近代の大学を支配する功利主義的価値観をどのように取り扱うのか、という問いが浮上するという構造を見事に明らかにしている。

この功利主義的価値観こそが、まさしく、冒頭に述べた今般の日本の大学行政をめぐる深刻な病弊の第一原因であるとは言えまいか。とすれば、日本の諸大学、ことにキリスト教諸大学が、その使命（ミッション）を果たし続けていくための方途は、茂牧人が論じるように、単なる知の集積ではない、「歴史の中の生の遂行としての学問論」を、大学全体の学問を支える「統合原理」として、ていねいに確認していくということ以外にはないのであろう。

（にしはら・れんた＝立教学院副院長・立教大学文学部長）

（A5判・三八〇頁・本体五〇〇〇円＋税・新教出版社）

神学会・「神学」76号
2014年12月26日発行

「神学」は半世紀以上も読み継がれた神学専門誌です！

主題「洗礼と伝道」

サクラメントとしての洗礼…芳賀　力
洗礼・堅信礼を巡る教会教育…朴　憲郁
洗礼礼典におけるエピクレーシス…小泉　健

自由研究

コリントの信徒への手紙一における パウロの聖書理解……焼山満里子
聖霊の位格性と働き…須田　拓
山田寅之助における信条と神学（一） ―「メソジスト型」この矯正論は何を通して」問題の一射程…棚村重行
三位一体論の形成と母なる教会…関川泰寛
教育が教育であるために(2)…長山　道
From Fate to Faith:Leaving the Quagmire for Green Pastures …Wayne A. Jansen
初期韓国教会の勧書制度と勧書人、 蘇堯翰長老…蘇　基天

（その他博士課程後期課程学生論文3本掲載）
A5判・252頁・定価2,800円＋税

「伝道と神学」5号
2015年3月25日発行

「伝道と神学」は東神大と教会を結ぶ伝道実践と神学の雑誌です！

日本伝道協議会長野大会記録

教会形成の言葉が会衆に届く言葉である…大住雄一
会衆に届く言葉と教会形成の言葉…鷹沢 匠/本城仰太

キリスト教学校伝道協議会記録

良心の自由から道徳教育を考える…深谷松男

教職セミナー記録

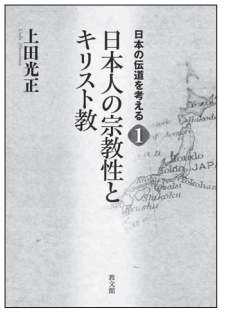
洗礼と伝道をめぐって―三つの角度から―…神代真砂実
再生としての洗礼―洗礼を目指して伝道するために…須田　拓
「キリスト教の洗礼の起源」に関する一考察…中野　実
マルティン・ケーラーにおける洗礼と伝道…長山　道
大きな救いの交響楽を取り戻そう！ ――明治期『大リヴァイヴァル』の洗礼と伝道の負の遺産を越えて…棚村重行
洗礼を巡る伝道と教育…朴　憲郁

（その他博士課程後期課程学生論文2本掲載）
A5判・198頁・定価1,500円＋税

お買い求めは
全国キリスト教書店または
本学へ直接お申し込みください
〒181-0015 東京都三鷹市大沢3-10-30
東京神学大学 総務課
Tel 0422-32-4185 Fax 0422-33-0667
E-mail soumu02@tuts.ac.jp

どうすれば日本にキリスト教は根付くのか？
上田光正著

日本の伝道を考える1
日本人の宗教性とキリスト教



小島誠志

「刊行にあたって」の中にこの著作の結論が出されています。それはこうです。「『歴史を顧み、その中から前進の方途を考える』の『前進の方途』に関しましては、わたしが永年、そして本シリーズでも繰り返し主張していることの一つは、宗教改革の三大原則の一つである『万人祭司』……という、今やほとんど忘れかけてきたこの宗教改革の原則に立ち帰り、信徒が真に自覚的に立ち上がり、教会形成と伝道の『主人公』となることです」。その結論を念頭に置きつつ、この日本という地盤で克服すべき問題の所在を明らかにしつつ福音の前進の方途を探っていこうという試みです。論述は著者の五十年にわたる伝道者牧会者の経験に裏付けられており、適確でしかも動かし難い重さをもっています。

本書は日本伝道論を構想した壮大な三巻に及ぶ著作の第一巻、「序論的な部分」（はじめに）にあたるものであります。日本伝道論は無数にありますが本書は徹底的に神学的に考え抜かれたものとしての著者の自負があります。「日本といういわゆる『伝道途上国』での伝道を組織神学的に、基礎から考えるという意味では、あるいは新しい試みであると言えるかもしれません」（「刊行にあたって」より）。「日本人の宗教性とキリスト教」、論述は三つの章によって進められています。

第1章　世俗化の時代は乗り越えられるのか

世俗化の定義がなされ、世俗化ということへの神学的考察が行われています。世界規模における世俗化は端的に「進歩の信仰」でありそこから「宗教多元主義」が生じているというのです。宗教多元主義を克服するものとして「天を想うベクトル」としてのキリスト教信仰があると論を展開します。

第2章　日本の教会はどのような道を目指して歩むべきか

この章では「『キリスト者となること』と『日本人であること』とが、日本ではしばしば矛盾・拮抗の関係になりやすいという問題……について」取り上げられます。

ザビエル以来のカトリック信仰の一時的な成功とその後の政治とのあつれき、迫害の歴史、明治初期のプロテスタント伝道の進展と内村鑑三不敬事件に象徴される国家との緊張関係、そこにあった問題の所在を明らかにするために、たとえばイザヤ・ベンダサンの「日本教」論などを引照しつつ論を進めます。

キリスト教信仰と日本人の問題は「神仏習合」にあるのではないかと言うのが著者の考え方のようです。「『神仏習合』とは、もともと日本に存在していた神道を後から来た仏教が完全には追い払わずに自らの内に採り入れ、宗教混淆（シンクレティズム）を起こしたことを言います」。

しかし、その上で、明治政府によって造り上げられた「国家神道」がキリスト教への大きな圧力となります。国家神道は教義を持つ明らかな宗教でありながら宗教を超えるものとされ、「単に『日本人であること』の国民的義務であるという『秘匿性』の様相の下に強権的に発動されます」。

こうした状況の中で、福音の「土着化や日本化は、日本を軽蔑することと同様、大変危険なことです。もしわたしたちが、神が愛し給うこの日本社会とそこに住む同胞たちを真に愛するなら、必要なことは、いったん日本社会を出て神に『献身』する『内的エクソダス』であると考えます」。

以下、初期ローマ帝国内でのキリスト教会の歩み、韓国キリスト教の発展について言及されます。

第3章　日本仏教との対質

仏教の主たる宗派の教え（哲理）を紹介しながらキリスト教の立場から問いを提出します。「仏教的哲理を悟り、その悟りを行ずる『行』によって、本当に『生老病死』の苦しみから救われるのだろうか」。

深い洞察による明快な宗教的日本人論、その間に著者のよって立つ教会の神学がくさびのように、要所要所に打ち込まれ輝いています。

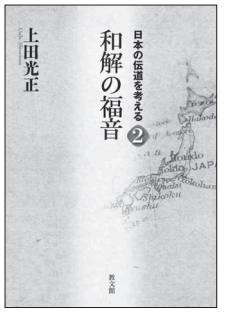
（おじま・せいし＝日本基督教団久万教会牧師）

（A5判・二一〇頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）

日本基督教団
富士見町教会会員
門叶国泰著
「聴聞学」の登場！
説教聴聞録
ローマの信徒への手紙
絶賛発売中！
主日説教との「一期一会」の出会い、自らの原典釈義を通して説教者の釈義を追想する聴聞録！　牧師に「説教学」があるように、まさに信徒による「聴聞学」の誕生である。1997年から毎週追想してきた説教の中から「ロマ書」に集中してまとめられたもの。
●ヨベル新書032・二〇四頁・一、〇〇〇円＋税
好評既刊の本
山口勝政著　ヨベル新書 027
キリスト教とはなにか？
ヨハネ書簡に徹して聴く
櫛田節夫師・評　講解説教の具体的な見本と励ましを望む牧師・神学生の方々は御力と御霊の導きを求めてさらに真剣に説教の取り組みへの挑戦を受けることでしょう。
●新書判・248頁・1,000円＋税
渡辺善太著作選⑪ ヨベル新書 024
聖書的説教とは？
加藤常昭師・解説
桂町キリスト教会矢木良雄師・評　聖書を正典的に説教するとはどういうことか、それがこの本の主題。もう一点は説教の聖書解釈は正典的神学的方法によって行うこと。熟読すべき名著！
●新書判・320頁・1,800円＋税
株式会社ヨベル　YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033　東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊資料・星

私たちが伝える「福音」とは何か？
日本の伝道を考える2
和解の福音

上田光正著



芳賀　力

本書は「日本の伝道を考える」と題された三部作の第二巻目である。ここでは、そもそも伝えるべき福音とは何であるのかが問われている。福音が喜びのおとずれであるのだとすれば、それを隣人に伝えたいと願うのは当然で、そこに熱意が湧かないのだとすれば、救いの確信が持てていないせいなのではないかと著者は問う。だからこそ、なぜ福音が喜ばしいおとずれであるのかを明らかにしなければならない。福音とは恵みの選びである。それは信仰義認の徹底化である。予定論の前提として「神が神であって、初めて人間は人間でありうる」という神と人間との不可逆的順序が確認されねばならない。私は救われているのか、誰が救いに与るのかといった議論は、みなこの前提を見失っている。恵みの選びとは、人間の側から考えられた論理ではなく、主体である神の側からの論理である。誰が救われるかは、終わりの日までただ神だけがご存じであるので、不可知論に留まるところからしか、正しい認識は得られない。したがって、神は永遠の昔から一方を選びへ、他方を滅びへと選んだという二重予定説も、また神は結局すべての人間をお救いになるはずだという万人救済説も、共に誤りである。選びの信仰においては、ただ聞いて信じる信仰が唯一の正しい対応であり、神への信頼において自分の選びを確信することが福音信仰の神髄なのである。著者は、この確信が日本のキリスト者に最も欠けているものだと見ている（二六頁）。この恵みの選びの信仰をしっかり確立するところから伝道への熱意が生じる。隣人が救われることもまた、天にある大きな喜びに与ることだからである。そこからまた信仰の継承、さらには教会が神学校を支えるという光栄ある務めも生じると述べられる。

福音とは何かという本書の主題にとって中心となっているのは、それが和解の福音であるということである。そこには、単なる個人の救いのみならず、世界の救いという次元も含まれている。罪の赦しを喪失したキリスト教はヒューマニズムでしかなく、逆に神の国の視野を失った福音は、個人的次元で自己完結してしまい、救済史の成就、伝道への召命、社会への関心などをすべて失っている。その両次元が重要なのである。

人間の罪はイエス・キリストの十字架から明らかになるのであるが、すでに創世記三章では物語という形をとって、すべての人間が神と等しく善悪の基準を持とうとする過ちについて語られている。罪とは、神の愛への不信頼または不信仰であり、神に代わって善悪の最終的な審判者になろうとすることである。原罪という概念は、堕罪が全人類にあまねく起こった出来事であることと、一人ひとりの全存在を汚している深い病根であることを表している（四六頁）。神はこの耐えがたい罪の呪いを忍耐をもって耐え忍んでこられたが、ついにキリストによる贖罪の出来事によって、神自らが義となり、かつ御子を信じる者を義とするに至った。仏教は生老病死の四苦を教えるが、その根源に罪があることは教えない。それを教えるのがキリスト教である。それは、神の御子が罪の責任を負うこと、その罪の結果を代理的に引き受けることを通して行われたのである。

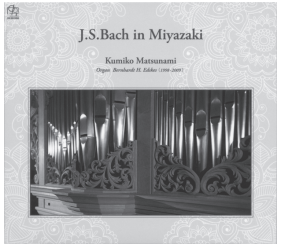
近代の主観的贖罪論、中世の客観的贖罪論に対して、古代教父の再発見となった宗教改革的な刑罰代償説が推奨される。評者自身はそのほかの系譜も含め、さらに広範に考えているが（『救済の物語』参照）、一応首肯すべき見識であろう。そのことをしっかり学ぶことが、義認・聖化・召命へ、そして教会の形成へとつながるのである。著者は最後にこの教会の伝道する業を、主の祈りを祈ることで主の御業を継承することの中に見出している。

日本に生を受け、キリスト者となった者にとって、今もってなかなか進展しない日本の伝道を考えることは、避けることのできない共通の課題である。この共通課題に正面から向き合う著者の勇気ある提言に、多くの者が耳を傾けるべきであろうかと思う。

（はが・つとむ＝東京神学大学学長）

（A5判・二〇二頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）

【好評発売中】
宮崎育ちのオルガン
～J·S·バッハの音楽と～
J. S. Bach in Miyazaki



演奏：松波 久美子
朗読：秋山　仁
日本福音ルーテル宮崎教会音楽監督及びオルガニスト、A. シュニットガー協会日本事務局長。
CD録音時間68分04秒　定価 2,940円

『レコード芸術』7月号・特選盤

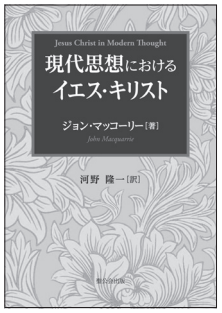
宮崎市内にある、白く美しい教会。そこに置かれたドイツの伝統をひくオルガン（エツケス建造）で、在りし日の音楽をみずみずしく、現代日本の暮らしのなかに息づかせてきた名手・松波久美子。自身すぐれたオルガン奏者だった「音楽の父」バッハの作品を、この大家と同じくドイツで研鑽を重ねた彼女の演奏で、いま――よく整えられたプログラムのなか、宮崎育ちのオルガンが、ゆたかな音楽美そのままに響かせてゆく、大小さまざまな、色とりどりの一一の名品。

●演奏会等の詳しいお問い合わせ先
〒880-0031　宮崎市船塚3-40
JELC宮崎内　シュニットガー協会日本事務局
TEL 0985-71-1812／FAX 0985-24-5438

発売元 LITHON［リトン］
101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

現代思想におけるイエス・キリスト

現代キリスト論の集大成
ジョン・マッコーリー著
河野隆一訳



竹内一也

著者ジョン・マッコーリーはスコットランド出身で長老派の伝統を背景とした神学者で、米国にいたときに聖公会に移り、イングランドでは聖公会の神学者として活躍した。本書は彼のキリスト論の集大成である。

本書は大きく三部に分けられる。第一部は「古典的キリスト論の源と立ち上がり」と題して聖書から始まり宗教改革の時代を経て合理主義の時代までを取り上げている。新約聖書の各書にわたりキリストについての箇所が検討され、古代教会を経て四五一年のカルケドン信条「……神性において完全な方であり、……人間性において完全な方である……二つの本性において混合されることなく、変化することなく」が成立し、これが中世と宗教改革の時代を通り抜けていく過程が示される。一七世紀にわたる時代を一気に駆け抜けていくのは性急な印象を受けるが、「キリスト論」に限定した神学史としては妥当なことであろう。カルケドン信条に表された古典的キリスト論がこれほどの長きにわたって存立し続けたことに驚きを覚える。

第二部は「古典的キリスト論批判及び再構築の試み」と題してカント、ヘーゲルに始まる啓蒙主義の時代から本書にとっての「現代」すなわち二〇世紀末までのキリスト論を扱う。本書の中で中心的な部分と言えよう。古典的キリスト論に対して合理主義などから向けられた根本的批判とそれに代わる考察がなされた時代である。この部の最後、二〇世紀後期のキリスト論が取り上げられている章の末尾に英語圏の神学者のキリスト論が取り上げられている。筆者の目をひいたのはN・ピッテンガーらのプロセス神学とJ・A・T・ロビンソン主教の存在である。プロセス神学は著者が古典的キリスト論に新たな見方をしていく上で助けを与えているようである。またロビンソン主教は「キリストの人間性の意味、人間の状態の完全な共有に目覚めさせた」と評価されている。

第三部は「今日の私たちにとってキリストは誰なのか」について、歴史的問題、キリストの人間性など、テーマごとに論じられる。「神性」について語られるところで、カルケドン信条の「神性（神の本性）」「人間性（人間の本性）」という言い方の「本性（ピュシス）」という言葉に注目し、本来「生まれる」という言葉に由来するギリシア語の「ピュシス」という言葉の意味を静的に理解するのでなく、「出現」あるいは「存在になる」という動的プロセス（過程）的に理解し、この二つの「ピュシス」がキリストにおいて共存していると理解することでカルケドン信条に新しい理解が与えられる。

この部の最後の章「キリストと救い主の姿」で著者は二一世紀を見据えた展開をしている。それは多元的な世界におけるキリスト論である。新約聖書には普遍主義の方向を示す箇所がある一方で、反対の方向を目指したと思われる箇所もある。例えば「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（ヨハネ14・6）はそのように理解され、何世紀もの間、多くのキリスト者が救いはキリスト教にだけあると言ってきたように思われる。

しかし、今日の状況は、例えばキリスト教初期の時代とは違っていて、キリスト者の態度も大きく変わる必要が出てきている。キリスト教は宗教的多元主義の時代を「ヘブライ人への手紙」11章にならってこう表現する。「信仰によって、モハメッドは……正しく恵み深い一人の見えざる神の使信を彼等にもたらした」。ヨハネ一四章六節についても排他的にとらえるのでなくキリストの言葉はロゴスの言葉であって他の伝統の中にもその表現があることを否定しないという方向で解釈されるとしている。

最後に、本書は大部であり、これだけの翻訳をなされたことに敬意を表するものである。ただ、かなり時間をかけられたためか訳語の不統一が見られる。例えば、カントの著作『質疑応答、〝啓蒙主義とは何か〟』（二三〇頁）と『問題 〝啓蒙主義とは何か〟に対する回答』（二三九頁）は同一の書と思われる。ご検討していただけると幸いである。

（たけうち・かずや＝日本聖公会逗子聖ペテロ教会牧師）

（A5判・六〇〇頁・本体四八〇〇円＋税・聖公会出版）

塀の中のキリスト
エン・クリストオの者への道
吉岡利夫著
上田 勇監修
ヨベル新書031
魂の叫びと更生への道 山中正雄師（日本アライアンス教団千葉キリスト教会牧師、精神科医）
本書は、限界を超えさせる、何ものかがあることを教えます。社会から隔離された刑務所で生活する無期囚、出会いと別れを繰り返す日々を生きる牧師と家族たちという、まったく異なる場所に住む両者を結びつけたものは、目に見えない聖なる力でした。だれもがその愛と力に守られ、活かされていることを知りたい。●二九六頁・一、〇〇〇円

好評既刊の本

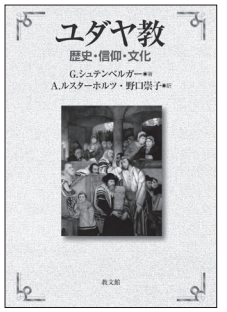
齋藤孝志著 ヨベル新書 008
まことの礼拝への招き
レビ記に徹して聴く
西 満師・推薦 一字一句が大切に講解されており、一見難解で敬遠されがちなレビ記の祭儀に示されている福音の奥義が見事に分かりやすく解き明かされています。
●新書判・174頁・1,000円＋税

齋藤孝志著 ヨベル新書 006
クリスチャン生活の土台
東京聖書学院教授引退講演
「人格の形成と教会の形成」つき
尾花 晃師・推薦 本書の示す、「クリスチャン生活の五原則」は、その生活において、絶えず実行されなければならない要点を余すところなく書いている。霊的・知的成長に多大な示唆。
●新書判・168頁・1,000円＋税

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊資料・星

ユダヤ人は何を信じ、いかに生きているのか？
G・シュテンベルガー著
A・ルスターホルツ、野口崇子訳

ユダヤ教
歴史・信仰・文化



内田　樹

ユダヤ教についての入門書を私もかつて一度訳したことがある。ロベール・アロンらの『ユダヤ教――過去と未来』（ヨルダン社、一九九八年）というフランス語の本である。私がユダヤ教について研究し始めた三〇年ほど前は日本語で読めるユダヤ教入門書は非常に少なかった。自分自身がずいぶん苦労したので、初学者のための信頼できる概説書・入門書が必要だと思って訳を引き受けたのである。悪戦苦闘して訳出したが学術的業績としてはほとんど評価されなかった（まだ絶版になっていないことだけが救いである）。本書を翻訳されたお二人には、このような報われることの少ない仕事のために誠実な訳業を仕上げてくださったことに対して、ユダヤ学研究の末席を汚す者の一人として心からの謝意を表したいと思う。

私が上記の入門書を訳したとき、私には一人もユダヤ人の知り合いがいなかった（広尾のシナゴーグにいた米国人ラビを質問のために何度か訪ねたことがあっただけである）。欧米であれ中東であれ、ユダヤ人たちが具体的にどういう宗教生活を送っているのか私は見たことがなかった。「種無しパン」というのがどういう味のものか、「仮庵」というのがどういう形態のものか、シナゴーグでのトーラーの朗誦がどういう音響のものか、知らなかった。何も知らないままに「ユダヤ人の宗教生活」について書かれた本を訳したのである。今から思うとずいぶん無謀なことをしたものだと思う。本書の訳者たちはユダヤの宗教生活について精通した方たちであり、訳文の信頼性と安定度は拙訳に比すべくもない。

本書の特徴は著者が非ユダヤ人であることにある。序文の「日本の読者へ」にも書かれている通り、著者の視点は「外部からの好意的な観察者の視点であり、中立的な視点でもある」。これは大きなアドバンテージだと思う。

ある宗教のもつ独特のエートスや律法や儀礼の独自性を「内側」から書くのはむずかしい。仮説的にいったん自分の信仰の外に出て、中立的たらんとするためには例外的な想像力と知的抑制が必要になるからである。それは例えば「野球」とはどういうものかを野球をまったく知らない人に説明しようと思うなら、野球選手に聞くより、人類学者に聞く方がわかりやすいということに通じている（人類学者はたぶん「フェアとファールの境界線はなぜ引かれるか」「ストライクとボールにはなぜ二つの意味があるか」というあたりから始めるだろう）。ある世界の「内側」にいる人にとってあまりに自明なので説明の要もないと思われることが、「外側」からはひどくわかりにくいことがある。その点で本書はきわめて目配りの行き届いた解説書となっている。

だが、それは逆から言うと、書いているうちに「インサイダー」であればつい興奮してしまうような話題や、口にするだけで怒りや恐怖がよみがえるような話題にはこの本は論及していないということでもある。もちろん、そのような烈しい感情的反応を引き起こすことは解説書の任ではない。これは座右に置き、術語の正確な語義や、表記や、歴史的文脈を知るためのレフェランスとして読まれるべき本である。

けれども、現代ユダヤ人の宗教生活と彼らの内面の葛藤を知るためには「ホロコースト」と「イスラエル国」がユダヤ人のものの考え方にもたらした決定的な影響については言及せざるを得ないのではないかという気持ちはする。いや、著者が熟慮の末「そういうことについては書かない」と決めてそうしたことはよくわかる。それゆえ、読者には、ユダヤ人の歴史と生活は「それについて中立的に語ることがきわめて困難な話題」抜きには叙し切れないという重い事実を心にとめておいて欲しいと願うのである。

（うちだ・たつる＝神戸女学院大学名誉教授）

（四六判・二三六頁・本体二一〇〇円＋税・教文館）

新刊

アンデルセンに聞く聖書の言葉

田島　靖則 著

●B6判並製　●定価：700円＋税

デンマークはルーテル教会（ルター派プロテスタント教会）を国の宗教とする北欧四国のうちの一つであり、アンデルセンの作品には、ルター派の信仰理解や倫理観が反映されているのではないかと考え、完訳の全七巻をそろえて読み進んだ。その時の副産物として生まれたのが、本書に収めた礼拝説教である。（「まえがき」より）

ISBN978-4-86376-043-1

LITHON［リトン］
〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

本屋さんが選んだ お勧めの本

仙台キリスト教書店　**黒田　忠**

『フォト・ソング ブック　美しい大地は』

写真 桃井和馬
選詞 陣内大蔵
演奏 Ensemble DUMAGUETE

本書は、写真家・桃井和馬さんが世界各地で撮影された写真に、シンガーソングライターで牧師の陣内大蔵さんが選んだ讃美歌21の歌詞が、静かに寄り添っています。また賛美歌のメロディを知っていただくために、弦楽四重奏の演奏CDが付いていますので写真、詞とあわせて演奏をお聞きいただけるフォト・ソングブックとなっております。プレゼントとしてもご利用いただける一冊です。

2,000円＋税
日本キリスト教団出版局

『エッサイの木』

ジェラルディン・マコックラン著
沢　知恵 訳
池谷陽子 絵

本書は、教会堂で木の板を彫る大工のおじいさんが、そこに現われた男の子に語る天地創造からクリスマスまでの24のお話集です。おじいさんは、聖書のお話を、まるでその場にいたかのように語りかけます。シンガーソングライター・沢知恵さんの訳と池谷陽子さんの絵がとてもやさしい気持ちにしてくれます。子供が読んでも大人が読んでも楽しく読める一冊です。

1,800円＋税
日本キリスト教団出版局

仙台キリスト教書店
〒980-0012　仙台市青葉区錦町1-13-6
東北教区センター・エマオ1F
TEL：022-223-2736（FAX同）
E-Mail：fqcwk524@ybb.ne.jp

バイブルハウス南青山　**鈴木淳之介**

『新版 人間とは誰か』

A・J・ヘッシェル著
中村匡克訳

本書は、一九七七年に出版された同書の新版であり、原著は一九六三年のスタンフォード大学での著者の講演に基づいています。現在、旧版の出版時よりもヘッシェルの著作の多くは日本語に翻訳されており（『イスラエル預言者』、『マイモニデス』など）、その思想に親しむことが出来ます。近刊のM・ブレンナー著『ワイマール時代のユダヤ文化ルネサンス』（上田和夫訳、教文館）によれば、一九世紀後半から始まったユダヤ文化の新しい運動は、多くの普遍的な思想を語るユダヤ人哲学者・神学者を生み出しました（フッサール、ローゼンツヴァイク、レヴィナス、ブーバー、ショーレム、ヨナス、ベンヤミン、アーレントなど）。ヘッシェルはブーバーの後継者として活躍し、その活動はユダヤ教の枠を超えて拡がるものでした。彼の生涯において見られる人類愛とも言える普遍性は、それが聖書（トーラー）を学ぶ中で得られたものであるという希望を私たちに与えてくれます。土より形造られ、神の息を吹きこまれ人間（human being）となった私たちが、この世界において〝人間としてある（being human）〟ことはどういうことかを、今こそ考えてみようではありませんか。

2200円＋税
日本キリスト教団出版局

『七十人訳聖書入門』

土岐健治著

七十人訳ギリシア語旧約聖書（以下、LXX）は、日本では全体の翻訳が未完で（英語・ドイツ語では既に完成）、新共同訳旧約聖書続編などに部分的な翻訳が収録されております。日本の旧約聖書研究はプロテスタント・キリスト教の影響で、ヘブライ語聖書の研究に関心が行き、LXXはその解釈に援用されるのが常でした。本書は、実にLXXこそがヘレニズム時代に、ギリシア語化される地中海世界のユニヴァーサリズム（普遍主義）の中で誕生した、ディアスポラ（離散）のユダヤ人による極めて重要な作品であり、後のキリスト教はもちろん、当時のユダヤ教においても重要なものであったことを丁寧に語ります。LXXの背後にある豊かな西洋古典の世界と多様な価値観の彩りを、立体的に聖書を読む助けにしてはいかがでしょうか。また、LXXを語りつつも時に現代の事柄に言及する土岐先生ならではの話題も満載で、聖書研究会・説教準備の教材としてもお勧めいたします。

1800円＋税
教文館

バイブルハウス南青山
〒107-0062　東京都港区南青山5-10-2
TEL：03-6418-5230
FAX：03-6418-5231
E-Mail：biblehouse@bible.or.jp

■新教出版社

説教をめぐるバルトとの対話（仮題）

ウィリアム・ウィリモン著／宇野　元訳

現代アメリカを代表する実践神学者・説教者が、自らのバルトに負うところいかに大であるかを告白し、従来ほとんど論じられてこなかったバルトの説教および説教論を徹底的に分析した大著。

A5判・464頁・予価6000円

日本的キリスト教の政治思想
――テーマとしての国家と宗教（仮題）

柳父圀近著

内村・南原・矢内原・大塚ら「テーマとしての国家と宗教」を鋭く意識していた無教会派の系譜において「ネイション」と「ステイト」のクリティカルな関係に迫った意欲的研究。

四六判・352頁・予価4000円

■日本キリスト教団出版局

詩編を祈る

W・ブルッゲマン著／吉村和雄訳

詩編は、聖書の民による神への叫びである。そこには神との対話を求めて止まない、熱意と勇気が証しされている。キリスト者がこの詩編の信仰に学び、その叫びを自らの祈りとするための、懇切なてほどき。英語圏を代表する旧約学者が、教会の信仰の再生を求めて記す詩編入門。

四六判・192頁・本体2000円

中澤正七
――北陸女学校と北陸伝道にささげた生涯

楠本史郎著

1902年、中澤は仏教が深く根を張る北陸のミッション・スクールに赴いた。時代はすでに国家主義が色濃く、キリスト教の学校はそのあり方が問われていた。国家とキリスト教の隘路をたどりつつ、その本質の堅持に努めた教育者の生涯は、現代に多くを語りかける。

B6判・152頁・本体1200円

INFORMATION
近刊情報

■教文館

若者と生きる教会
――伝道・教会教育・信仰継承

大嶋重徳著

どうすれば若者が教会に来るようになるのでしょうか？　大学生伝道のみならず全国の諸教会で奉仕する著者が教える《若者伝道の極意》。

A5判・104頁・本体1200円

「きよしこの夜」ものがたり
――クリスマスの名曲にやどる光

大塚野百合著

誰もが知っているクリスマスの賛美歌「きよしこの夜」は、いつどのように作られたのか。表題作ほか、名曲にまつわる秘話に迫る賛美歌エッセイ集。

四六判・248頁・本体2300円

書店名	郵便番号	住　所	電　話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西６丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 東北教区センター・エマオ1F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-8-2 千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisutokyoushotenhanna@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7b.biglobe.ne.jp/~yokohama-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00540-6-82826
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsha/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@mbox.kyoto-inet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9933			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/^tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net./	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2131	浦添市牧港1-60-6	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は　日キ販営業部　TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

新教出版社

福音と世界
2015年9月号

特集　教戦後70年の教会と神学3
戦後70年の教界と神学の課題。第3回は教会の戦争責任告白の意味を問う。
寄稿者＝山口陽一、秋山徹、金井創、川田洋一、大下幸恵

好評連載　レヴィナスの時間論（内田樹）、宣教学・事始め（来住英俊）、Christian Icon（八木美穂子）、ことばの履歴書（佐藤優）、詩篇の思想と信仰（月本昭男）、新約釈義（青野太潮）他

A5判・本体588円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

21世紀の信と知のために
キリスト教大学の学問論
茂牧人・西谷幸介編
人文学的な知への攻撃や無用論が強まる中で、キリスト教大学に求められる学問論の構築をめざす。9人の論者による意欲的論集。
A5判・381頁・本体5000円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL：03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

韓国映画「シークレット・サンシャイン」を見た。原題は「ミリャン（密陽＝地名）」で、シークレット・サンシャインは密陽の英訳である。世界中の映画祭で受賞した傑作らしいが、キリスト教会を批判しているとかで長い間、見る気が起きず、ようやくDVDを借りてきた。確かに傑作であった。

ミリャンで息子を誘拐犯に殺された母親が、ふと伝道集会に出席し信仰を得て立ち直っていく。しかし母親は信仰に過剰反応し、「汝の敵を愛せ」ない自分は信者とは言えないと煩悶する。牧師は「それは最も困難な試練であり、時期尚早です」と助言するが、彼女は受け入れず、刑務所に行って犯人と面会する。しかし、穏やかな受刑生活を送る犯人を見て、彼女の信仰が揺らぐ。それから教会への執拗な嫌がらせや、十戒の後半の五戒を、ことごとく破るという行為を続けていく。

気の滅入りそうなストーリーではあるが、鑑賞後の後味は悪くない。第一、クリスチャンが人口の三〇％近い韓国で、キリスト教を批判する映画を作っても、興行的に成功するはずがない。落としどころはきちんと用意されている。ネタバレはやめておくが、タイトル通り、ミリャン（密陽）という地に、キリストの密陽（シークレット・サンシャイン）は注いでいたのである。それはわかる人にはわかるし、わからない人にはわからない。

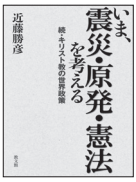
それにしても主人公が礼拝を妨害し、家庭集会をぶち壊しに行くシーンは凄まじい。本作の主演女優はカンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞した。しかし、それ以上にこのような映画を許容した韓国キリスト教界の成熟度を感じた。（寺田）

8月の新刊（価格表示は税抜）

いま、震災・原発・憲法を考える

近藤勝彦

続・キリスト教の世界政策



●四六判・204頁・本体2、000円

3・11、終戦70年を経て、日本の教会とキリスト者は現代が抱える難問と苦難をどのように考えていけばよいのか？　山積する社会問題を見つめ直し、神学者の立場から希望を持って問いかけた10編の講演録。

上田光正著『日本の伝道を考える』（全3巻）刊行記念
シンポジウム「日本の伝道を考える」

日時　9月28日（月）14時～16時
場所　日本基督教団銀座教会礼拝堂
パネリスト　須田拓氏（東京神学大学准教授）、藤原淳賀氏（青山学院大学教授）、田中かおる氏（日本基督教団安行教会牧師）
参加費　500円
主催　教文館出版部（要申込）　電話　03-3561-5549　Eメール　sales@kyobunkwan.co.jp

国家と宗教のあり方を問う

戦時下のキリスト教

宗教団体法をめぐって

キリスト教史学会編

●四六判・200頁・本体2、200円

一九三九年の宗教団体法公布に始まる宗教統制、諸教派の合同・分裂や教会への弾圧。混迷する戦時下の動向をめぐり、日本基督教団・カトリック・正教会・聖公会・ホーリネスが初めて一堂に会して議論を交わしたシンポジウムの書籍化。

ルターのりんごの木

格言の起源と戦後ドイツ人のメンタリティ

M・シュレーマン　棟居洋訳

「たとえ明日世界が滅びることを知ったとしても、私は今日りんごの木を植える」。ルターの言葉とされてきた言葉の起源から戦後のドイツ人の心性史を解き明かす！

●四六判・320頁・本体2、700円

スザンナ・ウェスレーものがたり

ジョン、チャールズ・ウェスレーの母

大塚野百合

メソジスト運動を指導したウェスレー兄弟の母・スザンナとはどのような女性だったのか。謙遜と静謐を実践した信仰の生涯を鮮やかに描き出す最新の評伝。

●四六判・248頁・本体2、400円

本のひろば
第六九一号　二〇一五年九月号
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇一五年九月一日発行（毎月一回一日発行）

新教出版社　〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1　Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
HP：http://www.shinkyo-pb.com, email：sales2@shinkyo-pb.com

知解を求める信仰

【新教セミナーブック39】

カール・バルト著／吉永正義訳

アンセルムスの神の存在の証明

『ローマ書』に代表される前期と『教会教義学』に代表される後期との転換点をなす、1931年刊行の重要な著作。「私はこの書物を、私のすべての書物の中心、最も満足すべきものと考えている」（『バルト自伝』佐藤敏夫訳より）。『カール・バルト著作集』第8巻に収録されたが品切のため長らく入手困難だったこの重要作品を《新教セミナーブック》に新たに収録。**8月20日発売**

◆A5判・本体2800円

同時重版

イスカリオテのユダ

バルト著／オットー・ウェーバー解説／吉永正義訳

「神論」第7章「神の恵みの選び」の詳細な補注を収録。

◆B6変・本体2200円

ヨハネの黙示録

私訳と解説

宮平望著

2006年に始まった本注解シリーズも**ついに完結**。聖書学の研究成果を十分に踏まえた上で、聖書の内的証言を最優先し、新旧約聖書の他の個所との関連に目配りしながら、一言一言の解説を施す。1節ごとにメッセージ豊かな釈義を読める逐条的コメンタリーをめざしてきた本シリーズは、信徒の聖書研究の座右の書として、高い評価を得ている。**8月20日発売**

◆A5判・本体2300円

人を恐れず天を仰いで

復刊『一週一信』

広岡浅子著

NHK連続テレビ小説「あさが来た」ヒロインのモデルの著書

著者は17歳で大阪の商家に嫁ぎ、炭鉱、銀行、保険会社等の経営に辣腕をふるい、女性実業家の先駆けとなった。女性の自立と教育にも関心を寄せ、日本女子大創設に尽力。還暦を過ぎて大阪教会で受洗。本書は『一週一信』と題して自らの剛毅な信仰観を瑞々しい筆致で綴った著書。いま百年を経て復刊。解説は影山礼子氏。

ドラマは9月下旬放映開始

◆B6変・本体1700円

実践する神秘主義

普通の人たちに贈る小さな本　現代人の霊性のために

イヴリン・アンダーヒル著／金子麻里訳

20世紀前半の英国の小説家・詩人にして神秘思想に関する多くの著作を著し、英国国教会で黙想会の指導者としても活躍したアンダーヒル。本書は、一般の人々にも届く言葉でキリスト教信仰の霊性を再解釈・再評価した名著であり、今なお広く読み継がれている。

◆四六判・本体 2100 円

発行所　〒162-0814　東京都新宿区新小川町九―一　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三二六〇―六五二〇　振替〇〇一七〇―五―一六七九
発行人　本村利春　編集人　中川　忠　印刷所　㈱平河工業社
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三―三二六〇―五六七〇
定価七八円（税抜七二円）〒62円
一年分一三〇〇円（送料共）